

対談

「愛するまち」を、あなたとつくる。



摂南大学
工学部建築学科教授 田中 直人
代表取締役社長 鯛 洋三

田中 直人(たなか なおと)

1948年神戸市生まれ。1975年東京大学大学院工学系研究科建築学専門課程修了。神戸市を経て神戸芸術工科大学環境デザイン学科教授。1997年4月から摂南大学工学部建築学科教授。

神戸市や静岡県、滋賀県、熊本県などでユニバーサルデザインの推進に携わる。熊本県公共的建築ユニバーサルデザイン策定委員会座長。工学博士。



ブランド・ビジョン“「愛するまち」を、あなたとつくる。”の実現に向け、ダイヤモンドシティは、今、どのような取り組みを進め、今後どのような方向にしているのか。「ダイヤモンドシティ・クリア」のユニバーサルデザインの開発に尽力頂きました、摂南大学 田中 直人教授と、弊社社長 鯛 にダイヤモンドシティが進めている“まちづくり”の現状と将来について語って頂きました。

ステークホルダーとのコラボレーション

田中：

改めて今回の「ダイヤモンドシティ・クリア」のユニバーサルデザイン(UD)開発を総括すると、私は3つのポイントがあったと思っています。まずひとつは、開発プロセスにおけるステークホルダーの積極的な参画です。これまで、どちらかといえば、バリアフリーにしてもユニバーサルデザインにしても、専門のデザイナーや知識の豊富な行政の担当者が中心となって建築物が作られてきました。しかし、今回の御社のプロジェクトでは、利用者の方々やハンディキャップをお持ちの方々などから、「何を不自由に思われているのか」、「何を望んでおられるのか」など、

様々な意見を集め、対応するプロセスをしっかりと組み込むことができたと思っています。

2点目は、継続的な改善活動です。オープンから半年経った今年の4月、「ダイヤモンドシティ・クリア」では、ご来場者の方々にUDに関するアンケートを実施されていました。何事にしても最初から100%、あるいは100点満点のものはできないもので、こうした改善活動を行い、ステップアップを図る取り組みは、とても良いことだと思います。

それから3点目は、“五感”の活用です。これまでの建築物では、視覚を重視したデザインがなされていましたが、人間には、視覚だけでなく、聴覚、嗅覚、味覚、触覚と多様な機能があります。こうした五感を活用した、さりげないデザインとすることができたと思います。

鯛：

今、UD開発プロセスでのコラボレーションや継続的な改善活動などお話をしましたが、本当にコラボレーションは重要だと思います。今回のプロジェクトでは、田中先生をはじめたくさんの方々のご協力やアドバイスを頂戴しましたが、実際にSCに来て頂くお客さまの視点をうまくかみ合わせる事が、本当に大切だと感じました。

また、今回のUD開発をきっかけに、ダイヤモンドシティは大きく変わったと思っています。お客さまや地域への対応、商売の仕方、空間デザインの考え方など、これまでの画一的な部分がどんどん少なくなってきたと感じています。同時に、新しいことに取り組もうとする意識も変わってきていると思っています。何か新しいことをやろうとすると、当然会社側に申し出て予算を得なくてはなりません、こうしたことを苦手に感じる人が、とても多いのが現状です。ですが「新しいことに光を当てて、社内でもっと広げることが大切なんだ」という意識を社内に浸透させる上で、今回のUD開発は大きな意義があったと思っています。

多様性を受入れたSC

田中：

私も御社の方々の意識が、ものすごく変わってきたなと感じています。建設部の方々だけでなく、何かUDに取り組むということで、お客さまサイドへの全社的な意識がこれまで以上に強くなってきているように感じます。また、御社への印象として、“前向きで柔軟性が高い”とも思っています。UDを進める場合、べき論で固まったマニュアル通りの発想で進めることは問題があり、柔軟性がとても大切です。その意味で、御社はすごく可能性があると思います。また、大規模SCのUDの場合、地域の味わいを如何に多くの人に認めてもらうかも重要だと思います。言い換えると、ローカリティという多様性を、“ユニバーサル”という形で受入れ、そしてより多くの人

にとって魅力的なものとしてつくり上げることが、大規模SCの最大のテーマだと思います。その意味からも、柔軟性はとても重要です。

鯛：

私達の事業は、極めて公共的な色彩が強く、ローカリティを意識すること、すなわち地域との密着、あるいは住民の皆さまとの密着ということは、私達の仕事の原点だと思っています。地域には様々な年齢の方、ハンディキャップをお持ちの方、健常な方など様々な方がいらっしゃいます。そうしたすべての方々と密着していきたい。そして最終的には、私達のSCを地域に欠かすことのできない存在にしていきたいと思っています。

また私達は今、郵便局や派出所、パスポートセンター、託児所、クリニックモールなど、“まち”機能を支えるテナントを導入するだけでなく、地域との防災協定が結べるのであれば、積極的に結んでいこうと動いています。できる限り緑を植えているのもそうです。そして本当に地域に無くてはならない場所にしていきたいと思っています。

次頁へつづく→



いろいろな車椅子とカート



敷地内警察連絡所

キッズコーナー



「ダイヤモンドシティ・クレア」

対談



「愛するまち」を、あなたとつくる。

心がかよいあうまちづくり

田中：

全く同感ですね。私は、今のお話は“まちづくり”の話だと思います。“まちづくり”の視点から商業施設を企画していくと、自ずと物販だけではなく、様々な情報サービスが必要になると思います。特にこれから高齢化が進んでいく状況下、地域に暮らす高齢者の方々に対して、どのような機能を果たしていくかも、重要なテーマだと思います。こうした中、「ダイヤモンドシティ・クレア」のご高齢のお客さまから、うれしい話を聞きました。「これまでは、いくところが無かったけど、ここには映画館もある。食事もできる。トイレもある。ここにいたら楽しい。だから1日中ここで過ごせる」と。こうした多様な機能を持つことは、大型施設だからできる部分でもあります。一方で、“まちづくり”を考える場合、私は、もっと大切なこととして、「親しみやすさをどう出すか」があるのではないかと思います。特に大型化したことによって、昔の商店街等が持っていたヒューマンコンタクトな部分が、欠落してきているのではないかと思います。このあたりは、如何ですか。



親しみやすさ、
地域のふれあいを大切に

「ダイヤモンドシティ・ルクル」に
おけるロボット実験



鯛：

今のお話は、その通りだと思います。私達は、UDの取り入れは早かったが、お客さまの視点、お客さまの立場に立ったシステムづくりは、逆に遅れていると思います。例えば、お客さまが品物を選び、支払をされ、品物を持ち帰られる一連の流れに、ご不便を掛けていないだろうか。フィッティングルームには鏡が1枚しかないが、店員はきちんとうしろ姿の感じを話せているのだろうか。何回もご来場頂くお客さまにとって、フードコートは飽きられていないだろうか。こうしたお客さまサイドの視点からあらゆるものを見直し、新たな知恵をどう出していくかが、大切だと思っています。

新たな知恵を出すということでは、今年の3月には、「ダイヤモンドシティ・ルクル」において、地元企業の要請に応える形で、ロボットが目的の店舗まで案内する、という世界で初めてとなる実験が行われました。ロボティクスと大規模SCは、今後何か良い関係ができないかと思い、現在ではタスクフォースをつくって継続的に検討を重ねています。この他にも、いくつかのタスクフォースをつくり、少し現実離れしてもかまわないので、他のSCでは考えつかないようなことを、われわれが先手を打って、どんどんやっっていこうとしています。



ダイヤモンドシティの特性を活かして

田中：

私は、そうした御社の大規模で、なおかつ、いろいろなことを展開される力を、魅力のひとつとして感じています。要はひとつのSCを開発して終わりというわけではなく、拡大成長戦略を進めることが、“まちづくり”のレベルを高めることにつながっていると思います。

そこで2点お願いがあります。ひとつは、そうした先駆的な取り組みを、積極的にモデル発信して頂きたいと思います。絶えず何かに挑戦している姿を、企業スタイルとしてもスタッフの方々の意識としてもどんどん前に出して頂きたいと思います。

もうひとつは、冒険かもしれませんが、多核1モールを固定パターンとしないで、いろいろと挑戦して頂きたいと思います。その中で、先ほど言いましたように、これからもっと、地域の構造とか地域の特性にあった、多様性を受入れるSCづくりを続けて欲しいと思います。つまり、商業空間であっても最終的には、地域にある文化的な要素をもっと取り込み、「あの施設は、自分たちの地域の施設なんだ」と地域の人々の誇りとなるような、地域の人々が大切にしてくれるような施設をつくり上げて欲しいですね。

「愛するまち」づくりのために

鯛：

そうですね。重要なことを2つ指摘して頂いて有難うございます。実際私達も、施設やUDを隠そうとは思っていません。むしろいろいろな方々に「どうぞ真似してください」と宣伝しています。そうすることで、最終的には社会がよくなることに通じるわけで、私達としても、悪い部分を改善しもっと良いものをつくるといった進化が必要になりますから。それに、画一的なものや、ローカリティが感じられないものだと、早晚飽きられてしまいます。それはすなわち、私達の命を絶つことになってしまいます。その地域に受け入れられる独自のものは何なのか、これはなかなか難しいところもありますが、それを追いかけてながら、それぞれのSCをつくっていきたいと思います。

また、世の中を変えていくような新しい発想のDNAを、役職員みんなが持っていると思っています。こうしたDNAへの気付きを促し、その挑戦意欲を鼓舞しながら、皆さまと一緒に、今後とも「愛するまち」づくりに専心していきたいと思います。



「ダイヤモンドシティ・クレア」での経験やお客さまからのご要望・ご意見を参考に、新規開発案件においてはさらに進化したUDの導入に努めています。

